

スキルの育成を視点としたシティズンシップ教育活性化の検討（Ⅱ）

—シティズンシップの構造と学習プロセス—

水山光春

(京都教育大学)

Study on the Acceleration of Citizenship Education through the Development of Skill (II)

—Structure and Learning Process of Citizenship—

Mitsuharu MIZUYAMA

2012年11月30日受理

抄録：本稿は、前稿（「スキルの育成を視点としたシティズンシップ教育活性化の検討」）の続編である。前稿では、従来の社会科教育における市民的資質育成論に、シティズンシップ教育がどのように位置付くのかを検討した。本稿では、シティズンシップ教育をより実践的で具体的なものとするために、シティズンシップの「スキル・技能」に着目し、その内容と学習プロセスを明らかにすることを試みる。そのために、まずシティズンシップの構造モデルとシティズンシップ育成を旨とする授業原理、およびそのうちの「社会形成」を旨とする授業の基本的学習過程を仮説的に示した。次いで、B. クリックから新ナショナル・カリキュラム（2007）に至る英国におけるシティズンシップ教育の発展過程を概観することを通して、政治的リテラシーに着目した「しっかりした強いシティズンシップ」と、多様性に着目した「しなやかで優しいシティズンシップ」の両方のシティズンシップの育成が必要であることを示した。最後に、その両者を組み込んだシティズンシップのスキル・技能を育成するための学習プロセスを明らかにした。

キーワード：シティズンシップ、シティズンシップ教育、市民的資質、スキル、学習過程、政治的リテラシー、多様性とアイデンティティ、クリック、ナショナル・カリキュラム

I. はじめに

近年、世界の各地で、新しい世紀を支える市民を育成するための、シティズンシップや市民性の教育が構想され展開されている。この傾向は我が国においても例外ではなく、社会教育としての有権者教育¹や、学校教育における社会系教科の教育などでもさかんにシティズンシップ教育が論じられるようになった。またその内容も、理念や制度²、カリキュラム³、評価⁴に関するものなど様々である。このような傾向の中で、本稿は学習内容・方法としての政治的リテラシー、および多様性に関わる「スキル・技能」の検討に中心を置く。

その理由の第一は、多様なシティズンシップ論が林立する中で、理念に関する議論も重要ではあるが、教養としてのみならず、参加型民主主義を実現するための、より能動的なシティズンシップを育成するためには、具体的な獲得能力としてのスキル・技能の検討が欠かせないと考えからである。

第二に、近代的なシティズンシップの教育を学校カリキュラムの中で必修化した英国に即して述べるなら、「社会的道徳的責任」「コミュニティへの参加」「政治的リテラシー」「アイデンティティと多様性」の四つのストランドの中で、とりわけ「政治的リテラシー⁵」およびそれと対をなす「アイデンティティと多様性」が、シティズンシップ教育にとって重要であると考えからである。

これまで、シティズンシップ教育においては、「政治的リテラシー」と「多様性」は別個に論じられることが多かった。しかし筆者は、これらは対をなし、言わばコインの裏表の関係にあり、両者を「スキル」でつなげることでより豊かなシティズンシップ教育が可能となると考えている。以下にその根拠を述べるとともに、具体的な展開について考察する。

Ⅱ. シティズンシップの構造モデル

具体的なスキルについて述べる前に、まず、市民的資質としてのシティズンシップ（教育）の構造を仮説的に示しておこう。本研究では、これまでに蓄積されてきた社会科教育学研究の成果、とりわけ棚橋健治の研究⁶ならびに英国のシティズンシップ教育論を踏まえ、民主主義社会を支える市民が持つべき資質や能力としてのシティズンシップの構造と授業論を、図1のように仮説的に設定する。以下にその概要を説明する。

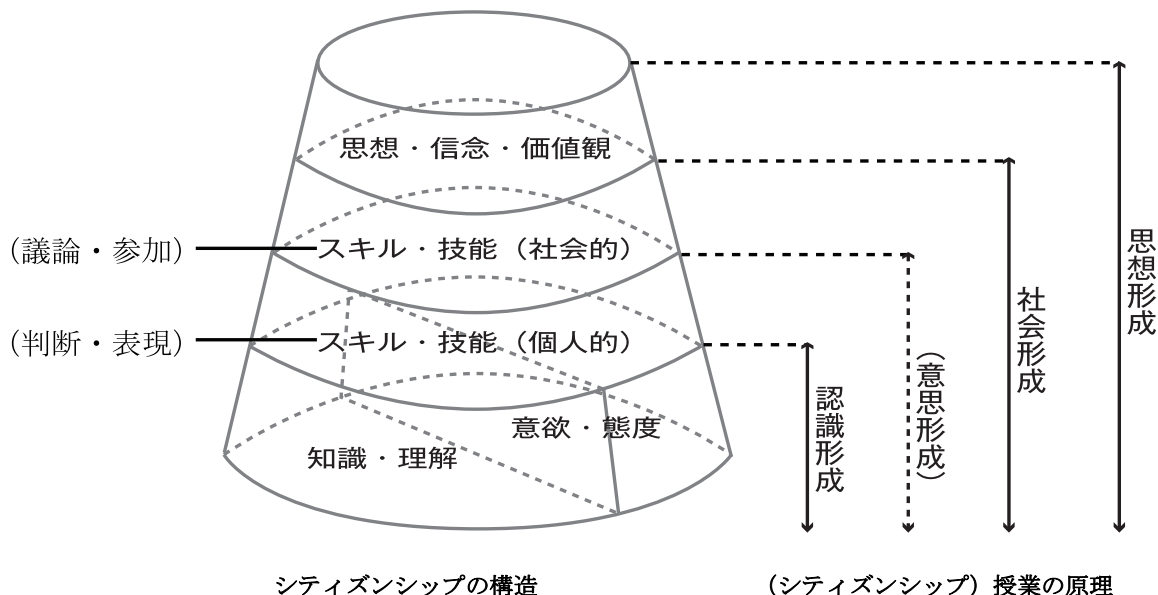


図1 シティズンシップの構造とシティズンシップ育成をめざす授業の原理

- ・ 図左（「シティズンシップの構造」）に示すように、市民的資質としてのシティズンシップを「思想・信念・価値観」「(社会的/個人的) スキル・技能」「知識・理解」「意欲・態度」の大きく4つの要素から構成する。
- ・ これらのうち、「知識・理解」は民主主義そのものについての知識や理解を指す。「スキル・技能」は民主主義社会をつくるための「スキル・技能」を指し、さらに議論や参加といった社会的なもの、判断や表現といった個人的なものに分ける。また、ここで「スキル・技能」と並記するのは、スキルに議論や判断の意味を含めるとともに、我が国の学習指導要領の評価の観点におけるような単なる「(社会的事象に関する) 技能」と区別するためである。さらに、「意欲・態度」は知識・理解やスキル・技能の獲得を誠実かつ意欲的・積極的に行おうとする実践的な姿勢を表す。なお、これら「知識・理解」、「(社会的・個人的) スキル・技能」「意欲・態度」の要素群は、実際的なシティズンシップの中核として相互に強く結びついており、このどれが欠けてもシティズンシップは不十分なものとなるを考える。
- ・ さらに、これら3つの中核的要素の背後には、個人の生き方ともいえる「思想・信念・価値観」があり、上記の要素群の獲得をメタにコントロールかつモニタリングしているものとする。その意味で、より実践的性格を有する「意欲・態度」とは分離して扱う。
- ・ 授業原理の視点からすると、シティズンシップ育成をめざす授業論は、シティズンシップの構造のうち、知識や理解の獲得までをめざす「認識形成」論、スキル・技能の獲得をめざす「社会形成」論、思想や信念、価値観の獲得をめざす「思想形成」論に大きく三分される。また、スキル・技能のうち、個人的な価値判断力・意思決定力やそれらを文字や口頭で表す表現力の育成を強調する場合、「意思形成（または意思決定）」論として特筆することもできるものとする。
- ・ これまでの社会系教科教育論の中には、学習者と社会との関わりの観点から、認識形成論、意思決定（合意形成）論、社会参加論に三分し、社会への参加・参画を最終目標とする考え方もあるが、本研究ではそのような学習論は採用せず、むしろ学習者自身の資質形成を重視する観点から、「生き方」としての「思想・信

念・価値観形成」を最終的なゴールとする。

なお、本稿においては、すべての授業原理に基づく授業構成のあり方について論じるゆとりがないので、図1右の授業原理の中の、特に「社会形成」の授業構成について以下、論じる。また、社会形成の授業は、基本的に概ね次のように進行するものとする（d、eの段階におけるさらに細かなステップについてはここでは省略している）。

表1 シティズンシップ育成をめざす「社会形成」の授業の基本的な展開（A）

a) 問題の把握 必要な情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ・そこに問題がありそうだ。 どこにどのような問題があるのかを調べよう。
b) 問題の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・問題は何か、問題はどのように定式化できるのか。
c) 問題事象についての知識・理解の獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜそのことが問題になるのか、なぜそのような問題が起こったのか。
d) 価値判断・意思決定・表現を通しての個人的スキルの獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・解決のために私にはどのような選択肢があるのかを判断し、やってみる。
e) 議論や参加を通しての社会的スキルの獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・解決のために社会にはどのような選択肢があるのかを判断し、やってみる。
f) ふり返り	<ul style="list-style-type: none"> ・（そもそもの問いの設定を含めて）自分（自分たち）の学習はこれでよかったのかをふり返る。

図1のシティズンシップの構造モデルに即して述べるなら、授業は基本的に「知識・理解」から「思想・信念・価値観」へと下から上へ進行していく。その際、表1の「f」の段階で、自らの「思想・信念・価値観」や生き方を見つめ直すことが重要になる。つまり、「私はなぜこのような意思決定や価値判断をするのか」を、自らの「思想・信念・価値観」に照らしてあらためて位置づけ直す、あるいは、場合によっては強化・修正する。これらは直接に「思想・信念・価値観」を育成しようとするものではなく、すでに学習者が持っている「思想・信念・価値観」を前提とした活動となっている。

Ⅲ. シティズンシップ教育における「スキル・技能」の発展

本章では、シティズンシップにおけるスキル・技能をクリックの政治的リテラシー論の発展としてとらえるとともに、それらが英国のナショナル・カリキュラム（以下、必要に応じて「NC」と略す）の中でいかに咀嚼され、発展していったかを歴史的にたどることを通して、シティズンシップにおけるスキル・技能の意味や特質を明らかにしていこう。

1. クリックのスキル・技能論

B. クリックは、初期の著作『政治教育と政治リテラシー』において、シティズンシップのスキル（技能）について次のように述べている。

政治リテラシーを身につけた人はどのような技能を持つのか。こうした人は、単なる事情通の観客ではない。能動的に参加しコミュニケーションをとることができ、参加を拒否する場合には明確で筋の通った説明ができる。他者のさまざまな見解に寛容でありながら、改革やその達成方法について考えることもできる⁷。

政治リテラシーを身につけた人は、影響を及ぼす戦略や、改革をもたらす戦略を考案できなければならない。また、正しいと主張できる目的を達成するために、適正な手段を見つけなければならない。行動すれば何か変革が生じる、というわけではない。とはいえ、他者に影響を与え何らかの変化をもたらすことは間違いない⁸。

そして、政治リテラシーの樹形図を次のように描いている⁹。

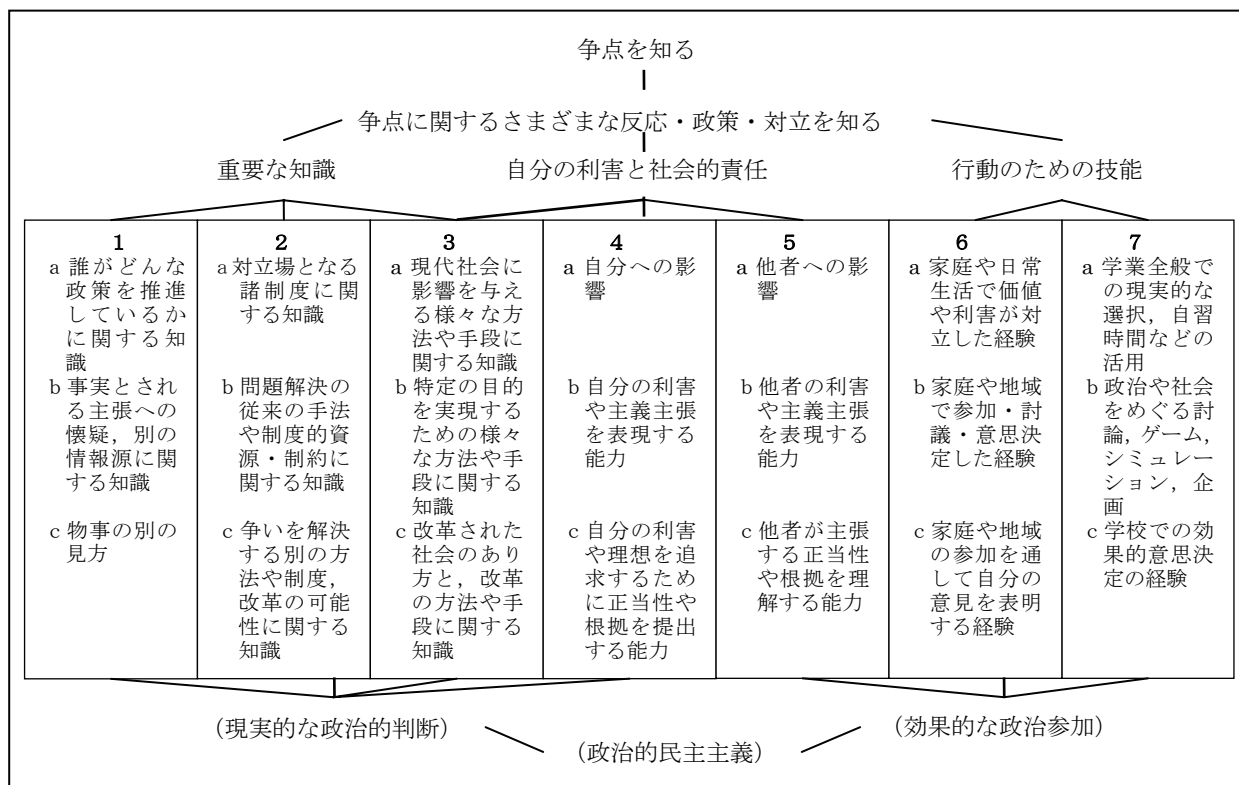


図2 クリックの政治リテラシーの樹形図

図2に示すように、この段階でのクリックは、「自分の利害と社会的責任」をおもに「能力」の意味でとらえるとともに、「(行動のための)技能」を「経験」の意味でとらえるなど、通常考えられる「能力」としての「技能」という扱いをしていない。

2. 教育諮問委員会報告書(クリック・レポート)におけるスキル・技能論

前図(「政治リテラシーの樹形図」)から20年を経て、「英国シティズンシップ教育諮問委員会報告書」(通称「クリック・レポート」)(1998)は、シティズンシップを「価値と性向」「知識と理解」「技能と能力」という要素の集合体として捉えた。また同報告書は、義務教育終了までに到達すべき本質的要素のうちの「技能と能力」について次のように詳述している。

表2 義務教育終了までに到達すべき本質的要素の概観¹⁰

技能と能力	
ア	口頭と筆記の両方で論理的に議論をする能力
イ	効果的に他人と協力し、働く能力
ウ	他者の経験と見解について熟考し、その価値を認める能力
エ	他者の視点に寛容である能力
オ	問題解決アプローチを発展させる能力
カ	情報を収集するために、現代的なメディアとテクノロジーを用いる能力
キ	一つの証拠を鵜呑みにしない証拠への批判的な接近と新鮮な証拠を探す能力
ク	ごまかしと説得の形(の違い)を識別する能力
ケ	社会的・道徳的・政治的な挑戦と状況を確認し、それに対応し、影響を与える能力

これを先ほどの「社会形成の授業の基本的な展開」に従って整理し直すと、次の表3のようになる。

表3 社会形成の授業の基本的な展開（B）[クリック・レポート]

学習段階		技 能 ・ 能 力
Ⅰ 問題把握		Bカ) 情報を収集するために、現代的なメディアとテクノロジーを用いる能力
Ⅱ 知識理解の獲得		
Ⅲ 価値の究明		Bウ) 他者の経験と見解について熟考し、その価値を認める能力
Ⅳ 個人的 スキルの 獲得	判断	Bキ) 一つの証拠を鵜呑みにしない証拠への批判的な接近と新鮮な証拠を探す能力
	表現	
Ⅴ 社会的 スキルの 獲得	議論	Bア) 口頭と筆記の両方で論理的に議論をする能力 Bエ) 他者の視点に寛容である能力 Bク) ごまかしと説得の形（の違い）を識別する能力
	参加	Bイ) 効果的に他人と協力し、働く能力 Bオ) 問題解決アプローチを発展させる能力 Bク) 社会的・道徳的・政治的な挑戦と状況を確認し、それに対応し、影響を与える能力
Ⅵ 振り返り		

表に示すように、クリック・レポートに記された9つの本質的要素としての「技能・能力」は、そのほとんど(8/9)が、本稿が提起する「社会的スキル・技能」に関わるものとなっている。

3. ナショナル・カリキュラム（1999）におけるスキル・技能論

クリック・レポートをたたき台としつつ、NC（1999）¹¹ 学習プログラムにおいては、「価値」の項目は消えて「知識と理解」および「スキル」の2項目に、さらに「スキル」は「探究とコミュニケーションのスキル」と「参加と責任ある行動についてのスキル」は以下のように分解・整理された。（以下、必要に応じて「キーステージ」は「KS」と略す）。

表4 ナショナル・カリキュラム（1999）におけるスキル

	キーステージ (KS) 3	キーステージ (KS) 4
探究とコミュニケーションのスキル(①)	a) 時事的に、政治的、精神的、道徳的、社会的、文化的な論点や問題や出来事について情報やその情報源（ICTに基づく情報源を含む）を分析することを通して考える。 b) これらの論点や問題や出来事についての個人の意見を、口頭あるいは文字で、根拠を示して述べる。 c) グループや探索的なクラス討議に貢献し、ディベートに参加する。	a) 時事的に、政治的、精神的、道徳的、社会的、文化的な論点や問題や出来事について、 <u>様々な</u> 情報源（ICTに基づく情報源を含む）からの情報を分析することを通して <u>調査する。</u> b) これらの論点や問題や出来事についての個人の意見を、口頭であるいは文字で表明し、根拠を述べ、 <u>擁護する。</u> c) グループや探索的なクラス討議に貢献し、 <u>公的な</u> ディベートに参加する。
参加と責任ある行動についてのスキル(②)	a) 他人の経験を推し量り、自分自身のものではない見解について考え、表明し、説明することができるように想像力を働かせること。 b) 学校とコミュニティ・ベースの活動の両方において交渉し、決定し、責任を果たす。 c) 参加の過程を振り返る。	a) 他人の経験を推し量り、自分自身のものではない見解について考え、表明し、説明し、 <u>批判的に</u> 評価することができるように想像力を働かせること。 b) 学校とコミュニティ・ベースの活動の両方において交渉し、決定し、責任を果たす。 c) 参加の過程を振り返る。

これをKSに分けることをせず、一括してスキルとし、「社会形成の授業の基本的な展開」にあてはめて整理し直すと以下ようになる。

表5 社会形成の授業展開 (C) [ナショナル・カリキュラム (1999)]

学習段階		スキル・技能
I 問題把握		C4①a) 時事的に、政治的、精神的、道徳的、社会的、文化的な論点や問題や出来事について、様々な情報源 (ICTに基づく情報源を含む) からの情報を分析することを通して調査する。
II 知識理解の獲得		
III 価値の究明		
IV 個人的スキルの獲得	判断	
	表現	C4①b) これらの論点や問題や出来事についての個人の意見を、口頭であるいは文字で表明し、根拠を述べ、擁護する。
V 社会的スキルの獲得	議論	C4①c) グループや探索的なクラス討議に貢献し、公的なディベートに参加する。 C4②a) 他人の経験を推し量り、自分自身のものではない見解について考え、表明し、説明し、批判的に評価することができるように想像力を働かせること
	参加	C4①c) グループや探索的なクラス討議に貢献し、公的なディベートに参加する。 C4②b) 学校とコミュニティ・ベースの活動の両方において交渉・決定し、責任を果たす
VI 振り返り		C4②c) 参加の過程を振り返る。

* なお、表の中の「スキル」における [C4①a)] の記号は、[C; NC (1999), 4; キーステージ (KS) 4, ①; 「探究とコミュニケーションのスキル」, a); 項目 a)] を意味する。表からわかるように、クリック・レポートと NC (1999) は、ともに社会的スキルの獲得に中心を置いた、かなり似通った構造となっている。

4. 新ナショナル・カリキュラム (2007) におけるスキル・技能論

改訂された新 NC (2007)¹² では、学習プログラムの構造そのものが変わり、「鍵となる概念」(知識) が新たに付け加わるとともに、「スキル」は「鍵となる学習プロセス」と改名され、さらに「学習プロセス」は「批判的思考と探究」「支持と表明」「見識をもって責任ある行動をする」の3項目に再構成された。(表6)。表6をさらに、市民力を育成するための「社会形成」の授業の展開にしたがって整理しなおしたものが表7である。

表6 ナショナル・カリキュラム (2007) における「鍵となる学習プロセス」

	キーステージ (KS) 3	キーステージ (KS) 4
①批判的思考と探究	a 時事的で論争的な論点や問題を調べるに際して、様々なアイデア、意見、信条や価値を考慮するとともに、振りかえる。 b 様々な情報や原典を用いて、論点と問題の探究を、調査し、計画し、実行する。 c 用いられた原典を分析・評価し、様々な価値、アイデア、視点について尋ね、バイアスを認識する。	a 時事的で論争的な論点や問題を調べるに際して、様々なアイデア、意見、 <u>仮定</u> や信念や価値を問い、 <u>振り返る</u> 。 b 様々な情報や原典や <u>手段</u> を用いて、論点と問題の探究を、調査し、計画し、実行する。 c 様々な価値や理念や視点を確認し、バイアスを認識しながら、用いた資料を <u>説明し</u> 、 <u>批判的に分析する</u> 。 d <u>ローカルからグローバルまでの様々な状況における視点と活動の間の結合と関係を探究しつつ、様々な視点を評価する。</u>
②支持と表明	a 議論や公式のディベートや投票を通して、自分の意見を他人に表現し、説明する。 b 様々な視点を考慮に入れ、研究、行動、討論を通じて自ら学んだことをふまえて <u>議論をする</u> 。 c 他者にもう一度考え直したり、意見を変えるようにし向けたり、もしくは他者を支持するようにし向けようとする <u>理由を与えて、議論を正当化する。</u>	a <u>必ずしも同意できないものも含めて、様々な考えや視点を批判的に評価する</u> 。 b 自分の意見を他人に表明するとともに、フォーマルなディベートや投票を含む調査や議論や活動を通して学んできたものから <u>結論を引き出す</u> 。 c 他者にもう一度考え直したり、意見を変えてもらったり、もしくは他者の考えを支持するために、 <u>様々な視点を考慮し表現した説得力のある議論を行う</u> 。

	d <u>自らが同意できる、もしくは同意できないかもしれない他人の視点を表現する。</u>	
③見識をもって、責任ある行動をする	<p>a 意図的に目標を達成するために、問題や争点に対して行動を起こすための創造的なアプローチを探す。</p> <p>b 時間と資源を適切に使いながら、他者に影響を与えたり、望まない変化に抵抗すべく、シティズンシップの問題に関して、個人もしくは他者と共に取り組み、交渉し、計画し、行動を起こす。</p> <p>c 現在および未来における、コミュニティとより広い世界に対する行動の影響を分析する。</p> <p>d <u>学んだことや、上手に進んだことや、出くわした困難さや、相違して行ったことを評価しながら、自分たちが成し遂げた進歩を振り返る。</u></p>	<p>a 意図的に目標を達成するために、問題や争点に対して行動を起こすための創造的なアプローチを探す。</p> <p>b 一人で、もしくは共同してシティズンシップの問題点に取り組むために、<u>調査し、位置づけ、計画を立てる。</u></p> <p>c 変化をもたらしたり、望まない変化に抵抗したりしながら、かつ時間と資源を適切に使いながら、他者に影響を与えるために、交渉し、決定し、行動を起こす。</p> <p>d 現在および未来における、コミュニティとより広い世界に対する行動の影響を評価し、<u>さらなる行動のために他者に推奨する。</u></p> <p>e 行動の意図的、不意図的結果や、<u>自分自身と同様の他者の貢献から学んだことを評価しつつ、自分たちが成し遂げた進歩を振り返る。</u></p>

表7 社会形成の授業展開（D）[新ナショナル・カリキュラム（2007）]

学習段階		スキル・技能
I 問題把握		<p>D 4 ① a) 時事的で論争的な論点や問題を調べるに際して、様々なアイデア、意見、仮定や信念や価値を問い、振り返る。</p> <p>D 4 ① b) 様々な情報や原典や手段を用いて、論点と問題の探究を、調査し、計画し、実行する。</p>
II 知識理解の獲得		<p>D 4 ① c) 様々な価値や理念や視点を確認し、バイアスを認識しながら、用いた資料を説明し、批判的に分析する。</p> <p>D 4 ① d) ローカルからグローバルまでの様々な状況における視点と活動の間の結合と関係を探究しつつ、様々な視点を評価する。</p>
III 価値の究明		<p>D 4 ① a) 時事的で論争的な論点や問題を調べるに際して、様々な理想、意見、仮定や信念や価値を問い、振り返る。</p> <p>D 4 ① c) 様々な価値や理念や視点を確認し、バイアスを認識しながら、用いた資料を説明し、批判的に分析する。</p>
IV 個人的スキルの獲得	判断	<p>D 4 ② a) 必ずしも同意できないものも含めて、様々な考えや視点を批判的に評価する。</p> <p>D 4 ② b) 自分の意見を他人に表明するとともに、フォーマルなディベートや投票を含む調査や議論や活動を通して学んできたものから結論を引き出す。</p>
	表現	<p>D 3 ② d) <u>自らが同意できる、もしくは同意できないかもしれない他人の視点を表現する。</u></p> <p>D 4 ③ d) 現在および未来における、コミュニティとより広い世界に対する行動の影響を評価し、さらなる行動のために他者に推奨する。</p>
V 社会的スキルの獲得	議論	D 4 ② c) 他者にもう一度考え直したり、意見を変えてもらったり、もしくは他者の考えを支持するために、様々な視点を考慮し表現した説得力のある議論を行う。
	参加	<p>D 4 ③ a) 意図的に目標を達成するために、問題や争点に対して行動を起こすための創造的なアプローチを探す。</p> <p>D 4 ③ b) 一人で、もしくは共同してシティズンシップの問題点に取り組むために、調査し、位置づけ、計画を立てる。</p> <p>D 4 ③ c) 変化をもたらしたり、望まない変化に抵抗したりしながら、かつ時間と資源を適切に使いながら、他者に影響を与えるために、交渉し、決定し、行動を起こす。</p>
VI 振り返り		D 4 ③ e) 行動の意図的、不意図の結果や、自分自身と同様の他者の貢献から学んだことを評価しつつ、自分たちが成し遂げた進歩を振り返る。

表7に示すように、新NC（2007）になって、観点が増えた分だけ、授業展開の全般に関わって育成すべきスキルの内容も豊かになった。特に、行動のためのスキルのみでなく、「問題把握」から「知識・理解の獲得」に至る部分のスキルが充実したことが特筆される。

5. スキル・技能の育成に着目した市民力育成のための学習プロセス

これまで検討してきた本章1から4の知見を整理すると、英国シティズンシップ教育におけるスキル・技能論は、クリックの初期の論考から、クリックに指導された諮問委員会報告書を経て、NC (1999)、新NC (2007)へと変化を遂げていることがわかる。

すなわち、クリックの論考においては、知識、自分の利害と社会的責任、技能(スキル)の三つの区分のもとに、技能は「経験」と同義とみなされるとともに、態度ともいえる「自分の利害と社会的責任」は「能力」に関係づけられるなど、「技能」と「能力」は別ものとされていた。それに対してクリック・レポートでは、「知識・理解」「価値・性向」「技能・能力」の三要素に区分し直され、「価値」に関する要素が新たに設けられるとともに、技能と能力は合体し、単なる経験は技能(スキル)とは呼ばれなくなった。次いでNC (1999)においては、スキル(技能)は「探究とコミュニケーション」「参加と責任ある行動」の二つにおおきくまとめられるとともに、KS3とKS4で段階的な違いが設けられた。さらに新NC (2007)では、「探究とコミュニケーション」「参加と責任ある行動」という二つのカテゴリーは「批判的思考と探究」「支持と表明」「見識をもって責任ある行動をする」に再区分されるとともに、スキルという呼び方はされなくなり、より手続き的な「(鍵となる)学習プロセス」という概念的な呼び方がされるようになる。と同時に、「問題把握」(I)から「振り返り」(VI)に至るまで、学習過程の全般を視野に入れたスキルの育成が目ざされることとなった。

こうしてスキル観の変遷をたどると、スキルの意味が、筆者のとらえる「個人的な(判断・表現の)スキル・技能」や「社会的な(議論・参加の)スキル・技能」という狭い意味から、知識・理解に関わるものにまで、拡大されつつあることがわかる。

また、次のような批判的意味が込められていることにも特徴が見られる。

- 1) 論点や問題について探究し判断するにあたっては、様々な資料や情報、原典や手段を用いるとともに、バイアスを認識し、一つの証拠を鵜呑みにせず、ごまかしと説得を区別する。
- 2) 自らが同意できるもの、できないものも含めて、他者の経験と見解を熟考し、その価値を認めるとともに、それらを表現・説明し、そして批判的に評価する。

6. 新ナショナル・カリキュラムにおける「多様性とアイデンティティ」

新NC (2007)では、前述したように、鍵概念が「デモクラシーと正義」「権利と責任」「アイデンティティと多様性」に整理された。その特色は、従来型の政治的リテラシーに関わる前二つに、新たに「アイデンティティと多様性」が付け加えられたことである。

新NCにおける鍵概念「アイデンティティと多様性」の内容はKS3, 4では基本的に同じで、以下の通りである。

1.3 アイデンティティと多様性：英国でともに暮らす

- a アイデンティティは複雑で、何度も変化する可能性があり、イギリスで市民になることが何を意味するかの様々な理解によって形作られるものであることの正しい理解
- b 英国における多様な国籍、宗教的、民族的、宗教的な文化、集団、コミュニティと、それらの結びつきについての調査
- c 英国と、英国以外のヨーロッパや、より広い世界との間のつながりの考察
- d コミュニティの結束と、何度もコミュニティにおいて変化を引き起こす様々な力の調査

注) 英国で共生するに際してのアイデンティティと多様性：このことは、多様な社会における集団やコミュニティによって保持される多面的なアイデンティティと、これらのアイデンティティの社会における変化による形作られ方を含んでいる。たとえば、いかに移住がコミュニティを形成してきたか、共通かつ共有のアイデンティティ、何が集団やコミュニティを統合するか、英国における共生がいかに政治的、社会的、経済的、文化的な変化によって形成され、現在に至っているかを子どもたちは学ぶことができるが、そのような変化に関する歴史的な脈がどのようにあてはめられるかはよく考えなければならない。

すべての子どもたちは、法的もしくは居住に関する状況にかかわらず、今日の英国で市民であることの意味するところの理解を探究し、発達させるべきである。

すなわち、鍵概念「アイデンティティと多様性」は、政治的リテラシーとして従来ので正当的な他の二つの鍵概念（デモクラシーと正義、権利と責任）が、市民に普遍的な市民的権利・義務、責任を期待するのに対して、そのような画一的なとらえ方では見過ごされてしまいかねないシティズンシップであること、そしてそれらを包摂する新しい概念が必要であることを示している。つまり、公的な問題を扱うシティズンシップ教育では捉えきれない私的領域における、自己及び他者への肯定感に基づいた「あたためあう関係¹³」にも目を向ける必要性のあることを示している。このことは、民族的、宗教的側面のみならず、文化的、経済的側面においてもあてはまる¹⁴。以上を踏まえると、シティズンシップ教育の重要な要素として、次のような二つのシティズンシップを構想することができる。

公的な、政治的リテラシーの育成による	しっかりした強いシティズンシップ
私的な、多様性に着目した他者性に基づく学びによる	しなやかで優しいシティズンシップ

Ⅳ. まとめに代えて

－「スキル・技能」の育成に着目したシティズンシップの学習プロセス－

これまでの議論を総合しつつ、表1「シティズンシップ育成をめざす社会形成の授業の基本的な展開」を踏まえ、次のような「スキル・技能の育成に着目したシティズンシップ育成のための学習プロセス」を構想する。

表8 スキル・技能の育成に着目したシティズンシップ育成のための学習プロセス

学習段階	スキル・技能		
	しっかりした強いシティズンシップ	しなやかで優しいシティズンシップ	
I 問題把握	・(現代的メディアやICTを含む) 様々な情報源や原典や手段を用いて、時事的で論争的な、政治的・精神的・道徳的・社会的・文化的論点と問題の探究を、調査し、計画し、実行する。	・時事的で論争的な論点や問題を調べるに際しては、様々なアイデア、意見、仮定や信念や価値を問ひ、振り返る。	
II 知識理解の獲得	・様々な価値や理念や視点を確認し、バイアスを認識しながら、用いた資料を説明し、批判的に分析する。	・ローカルからグローバルまでの様々な状況における視点と活動の間の結合と関係を探究しつつ、様々な視点を評価する。	
III 価値の究明	・時事的で論争的な論点や問題を調べるに際しては、様々なアイデア、意見、仮定や信念や価値を問ひ、振り返る。 ・様々な価値や理念や視点を確認し、バイアスを認識しながら、用いた資料を説明し、批判的に分析する。	・他者の経験と見解について熟考し、その価値を認める。	
IV 個人的スキルの獲得	判断	・一つの証拠を鵜呑みにせず、証拠に批判的に接近するとともに、新しい証拠を探す努力を怠らない。 ・必ずしも同意できないものも含めて、様々な考えや視点を批判的に評価する。 ・自分の意見を他人に表明するとともに、フォーマルなディベートや投票を含む調査や議論や活動を通して、正当性、妥当性のある結論を引き出す。	
	表現	・論点や問題や出来事についての個人の意見を、口頭であるいは文字で表明し、根拠を述べ、擁護する。 ・現在および未来のコミュニティとより広い世界に対する行動の影響を評価し、さらなる行動のために他者に推奨する。	・自らが同意できる、もしくは同意できないかもしれない他人の視点を表現する。
V 社会的スキルの獲得	議論	・口頭と筆記の両方で論理的に議論する。 ・クラスでの討議や、公的なディベートに参加する。 ・ごまかしと説得の違いを識別する。 ・他者にもう一度考え直したり、意見を変えてもらったり、もしくは他者の考えを支持するために、様々な視点を考慮し表現した説得力のある議論を行う。	・他人の経験を推し量り、自分自身のものではない見解について考え、表明し、説明し、批判的に評価することができるように想像力を働かせる。

	参加	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決的アプローチのもとに、効果的に他人と協力し、目標を達成する。 ・クラスでの討議や、公的なディベートに参加する。 ・目標を達成するために、問題や争点に対して行動を起こすための創造的なアプローチを探す。 ・変化をもたらしたり、望まない変化に抵抗したりしながら、かつ時間と資源を適切に使いながら、他者に影響を与えるために、交渉し、決定し、行動を起こす。 ・学校とコミュニティ・ベースの活動の両方において交渉し、決定し、責任を果たす。 	
VI 振り返り		<ul style="list-style-type: none"> ・参加の過程をふり返る。 ・行動の意図的、不意図的結果や、自分自身と同様の他者の貢献から学んだことを評価しつつ、自分たちが成し遂げた進歩を振り返る。 	

本稿では、能動的シティズンシップを育成するためのスキル・技能に着目し、クリックの初期の論考から新ナショナルカリキュラム（2007）までのスキル・技能をたどりながら、二つのシティズンシップ（「しっかりした強いシティズンシップ」と「しなやかで優しいシティズンシップ」）を育むための学習プロセスについて検討した。しかし、考察は途半ばであり、1) 本稿が仮定する「スキル・技能」概念と新ナショナル・カリキュラムにおけるそれらとの間の整合性の検討や、2) 上記、後者の「しなやかで優しいシティズンシップ」の内容についての検討に不十分さを残している。これらの克服は次の課題としたい。

- 1 財団法人「明るい選挙推進協会」による広報誌「私たちの広場」、情報誌「Voters」ではたびたびシティズンシップ教育が取り上げられている。
- 2 Hashizaki Y. (2011) Teaching of Unity and Diversity in Citizenship Education, *Global Education*, Vol.13, 日本グローバル教育学会, pp.20-29 など
- 3 川口広美（2010）「社会変容に対応するシティズンシップ教育カリキュラム構成法の革新—イングランド1999年版ナショナル・カリキュラムを手がかりに—」, 社会科研究, No.73, pp.21-30 など
- 4 岩田一彦研究代表（基盤研究（B）「市民性諸教科における教科書および指導/・評価の一体化に関する国際比較研究」など
- 5 小玉重夫（2012）「シティズンシップ教育と政治的リテラシー」教育研究, 初等教育研究会, No.1330, pp.14-17
- 6 棚橋健治（2007）『社会科授業診断, 「よいと言われる授業に潜む危うさの研究』』明治図書
- 7 クリック, B. (2011) 『シティズンシップ教育論』, 法政大学出版局 [Crick, B. (2000) *Essays on Citizenship, Continuum*] p.91. なお, ここでは「political literacy」を「政治的リテラシー」とせず, 訳文に合わせて「政治リテラシー」としている。
- 8 クリック, B. (2011) 同上書, p.101
- 9 クリック, B. (2011) 同上書, p.102. なお, この図は「Crick, B. and Porter, A. (eds.) *Political Education and Political Literacy*, Longman」から転載されたもので, 原文は1978年に出版されている。
- 10 QCA(1999) Overview of essential elements to be reached by the end of compulsory schooling, *Education for Citizenship and Democracy in the schools*, QCA, p.44.
- 11 Department for Education and Employment / The Qualification and Curriculum Authority (DfEE/QCA) (1999) *Citizenship, the National Curriculum for England*, London, DfES/QCA.
- 12 Qualifications and Curriculum Authority(QCA)(2007) *Citizenship National Curriculum Programme of Study*, QCA.
- 13 若槻健（2011）「人権教育に基盤を置いた市民性教育実践の事例研究—『あたためあう関係』が参加に与える意味—」カリキュラム研究, 日本カリキュラム学会, 第20号, pp.29-41
- 14 岡野八代（2003）『シティズンシップの政治学—国民・国家主義批判—』白鐸社/現代書館